

A. シェーンベルク 《架空庭園の書》（作品 15）の分析と演奏解釈の試み  
A Study of "Das Buch der hängenden Gärten" (op.15) by Arnold Schönberg  
through Performance and Analysis

木原（川辺）茜 KIHARA (KAWABE) Akane

本論文はアルノルト・シェーンベルク Arnold Schönberg (1874-1951) の連作歌曲《架空庭園の書 Das Buch der hängenden Gärten》の分析と考察を行い、その成果をもとに演奏表現の可能性を探求することを目的にしている。従来の音楽学的研究では、当該作品の作曲学的分析やテキストの作者であるシュテファン・ゲオルゲ Stefan George (1868-1933) との関連を論じた研究が多いが、これらの研究は作品の演奏表現を考察するうえで指標を与えるようなものではなかった。よって本論文は、従来の音楽学的研究を基礎にしながらも、音楽学的側面と演奏的側面との架け橋となりうる成果を目指している。

《架空庭園の書》はシェーンベルクの無調の時期の代表作であるとともに、同時代人であるゲオルゲをテキストに用いた唯一の連作歌曲という点において、重要な声楽作品のひとつとみなされている。しかし今日においても無調の作品が広く理解されているとは言い難く、したがって当該作品の演奏機会も決して多くはない。無調の作品は調性の支えや聴く者の耳に残るような美しい旋律も欠いているが、その代わりに古典派やロマン派の歌曲では使用されなかった大胆な旋律や斬新な響き、デク라마ツィオンの強調によって、聴く者の心にさまざまな感覚を喚起し、時に激しい感情のうねりを描き出せる点に強みがある。演奏と聴取における無調作品の困難さをいかに克服し、その作品の魅力をどのように伝えることができるかという問題意識が、本研究の出発点となっている。

1. 「20 世紀初頭における演奏と受容」では、1910 年ウィーンで行われた《架空庭園の書》の初演及び、1912 年のベルリンとウィーンでの再演の状況と様子を探った。先行研究ならびに、アルノルト・シェーンベルク・センターのアーカイヴに所蔵されている新聞評から該当するものを抽出および訳出し、初演歌手の声の性格や演奏表現、聴衆の傾向などから、当時当該作品がどのように認識され受容されたかを考察した。ここで得られた情報から、《架空庭園の書》の受容は賛否二分される状況であったと理解された。すなわち、シェーンベルクのいう「不協和音の解放」によってもたらされた斬新な響きと、歌曲における新たな世界観が生み出された反面、演奏と聴取の両者にとっての困難さも生じたのである。当時の音楽状況と、多様な音楽が混在する現代の音楽状況は言うまでもなく異なっており、現代における当該歌曲の受容の在り方が当時と同じとは言えない。しかし、賞賛の声にあった「新しい響きや和声」、「音楽の領域を別の次元へ

高めた」や、反対に非難の声にあった「暗くて陰鬱」、「うんざりする」といった言葉は、そのどちらもが確かにこの作品の特徴を示しており、作品理解と演奏解釈に示唆を与えるものとなった。

2. 「A.シェーンベルクの歌曲創作とその背景」では、19世紀から20世紀への世紀転換期に、さまざまな音楽の方向性が混在する中で、シェーンベルクがどのような音楽状況の中に入っていたのかを概観した。「世紀末」という特異な時代感覚のなかで、シェーンベルクは尊敬するリヒャルト・ワーグナーRichard Wagner (1813-1883) やヨハネス・ブラームス Johannes Brahms (1833-1897) の音楽語法からスタートし、グスタフ・マーラーGustav Mahler (1860-1911) や師であり友であるアレクサンダー・フォン・ツェムリンスキーAlexander von Zemlinsky (1871-1942) の影響を受けながら独自の音楽観を育んでいった。シェーンベルクの《架空庭園の書》と同時期には、弟子であるアルバン・ベルク Alban Berg (1885-1935) やアントン・フォン・ヴェーベルン Anton von Webern (1883-1945) もゲオルゲの詩を歌曲のテキストとして使用している。そのことから、この時期の新ウィーン楽派にとってゲオルゲの詩作が重要な題材となっていたことが分かる。

後半では、《架空庭園の書》が「連作歌曲」と扱われることの妥当性について先行研究や「連作歌曲」の歴史的背景をもとに検討した。当該歌曲は連続した詩を用い、テキストの連続に物語性がある点、また「季節性」や「構造上の統一感」等から、無調という新しい様式で書かれてはいても、伝統的な連作歌曲の伝統に則っていることが明らかになった。また彼の創作におけるテキスト選択は、彼の求める音楽に従って変化したことでも注目でき、そこからシェーンベルクの思想的な側面も浮き彫りになった。

3. 「S.ゲオルゲの『架空庭園の書』：テキスト分析」ではゲオルゲの『架空庭園の書』について、彼の人生との関連や「架空庭園」という表題の意味を踏まえながら考察した。シェーンベルクの《架空庭園の書》は、ゲオルゲの原詩の第2ブロックにあたる15詩を選択しているが、ゲオルゲの原詩は本来31の詩から構成されている。作品理解を深めるためには作曲されなかったテキストの内容や関連性を知ることが不可欠と考え、構造や韻律、テーマ性、コンテキストの面から多角的に分析し、その特徴をまとめ解釈を加えた。その結果、これらの31篇の詩は互いに連関性があり、シェーンベルクが選択した15の詩だけでは単純な恋愛詩として捉えられがちだが、全体をみることで「架空庭園」という表題からもたらされる非現実性と、詩集の枠構造における二面性を用いて、「生と死」、「出会いと別れ」、「聖性と俗性」といった、様々なパラドクスの状況が描き出されていることが明らかになった。

4. 「A.シェーンベルクの《架空庭園の書》：音楽分析」にあたり、まずシェーンベルクが当該歌曲に選択した15篇の詩の作曲プロセスを概観した。彼がゲオルゲの原詩の第2ブロック以外の詩にも作曲を試みた事実は、はじめから15曲の連作歌曲を意図したのではないことを示し

ている。ツィクルス全体の構造と、旋律分析を中心とした楽曲分析を進めていく中で、シェーンベルクが楽曲全体を通して使用した特徴的な手法は以下のものだと考えられる。すなわち、「モチーフ」や半音進行や全音音階的な進行などの「指向性」、水平方向と垂直方向に用いられる「音程」等である。これらの要素は、楽曲形成の核となっているだけでなく、演奏者への示唆を与えるものだと考えられる。

2.～4.で得られた成果から、5. 「分析と演奏への試論：各曲のテキスト・音楽分析」では演奏家の立場から総合的な楽曲分析を行い、個々の部分における演奏解釈を加えた。前章で挙げた要素をはじめとして、テキストと音楽の関係、演奏困難な部分の克服のアイデアや、演奏者が考慮すべき点、演奏者と聴き手のための視点の転換の提案など、多岐にわたって言及している。音楽研究によって明らかになった特徴は、場合によっては演奏や演奏形態に直接活かすことができる。また直接的に関与しなくても、演奏家の解釈という段階を通して、それらは演奏に働きかける要素となり得るのである。研究を通して得られた成果は、その二つの段階の演奏解釈と表現を通してはじめて、聴かれるための音楽となって現われる。学問的に積み重ねられたものと、演奏研究として積み上げたものを、相互に関係づけて研究することが、解釈の幅を広げ、それによって聴取の幅も広がることにつながるのである。さらには、解釈と演奏表現を通して作品の内容や詩的世界、音楽構造などの様々な側面を提供していくことは、当該作品だけでなく多くの無調作品が持つ困難さを克服しうる鍵となり、作品の持つ魅力より伝えていくことになるのである。